咸宣園最後の講師

勝屋明浜先生

高倉芳男

広瀬淡窓の咸宣園は名声天下に普く、笈を負う全国の俊秀陸続として来り、幕末の動揺期から明治大正の発展期に儒学、詩文はもとより、政治、思想、経済、教育、仏教、医学、書画等の各方面に亙って国家有為の人材を輩出した。

これもとより淡窓の学徳の然らしむるところではあるが、その後を嗣いだ諸先生の功労も決して忘れてはならないものである。たゞ管見の及ぶ処、咸宣園の研究は殆んど淡窓の研究に終始している傾がある。これ淡窓の偉大さと共に、淡窓全集の刊行、殊にその懐旧樓筆記、淡窓日記等の好資料が存している事もその一因であらう。筆者は予ねてより淡窓没後の咸宣園について関心をもっていたが、玆に最後の講師勝屋明浜先生についての小文を草することにした。

先づ明浜の立場を明にするために淡窓開塾以来の諸先生をのべると

文化二年（一八〇五）淡窓開塾、一時旭窓に塾政を執らせる。後旭窓は大坂に開塾。
安政四年（一八五七）高弟青村塾政を執る。
文久二年（一八六二）林外（旭窓の子）塾政を執る。明治四年林外上京、以後入門者等不明。
明治十三年（一八八〇）村山姑南教授に任ず。
明治十八年（一八八五）広瀬濠田の塾政。

明治廿一年（一八八八）諫山菽村の塾政。但し菽村は廿六年に病没。
明治廿九年（一八九六）勝屋明浜を講師に招聘。仝卅年に至る。

本稿は明浜先生を理解して頂くために、資料を列挙しようと思ったが、折角の資料であるので若干の説明を付して年代順に記すことにした。研究不十分ではあるが、同学の士の参考とし、筆者えの示教を仰ぐ意味で草した。首尾の整はぬ点御了承を乞う

（一）

勝屋明濱、名は馬三男。明濱は号であり、他に子駿、驂、紫明、明浜幽人とも称している。家は代々肥前鹿島藩に仕えていて、その生家は佐賀県鹿島市（城跡に県立鹿島高校が建てられており、その正門近く）城内に当時のまゝ保存せられている。明治三年九月十日の誕生であるから、今年は丁度生誕百年目にあたる。明治拾年（一八七七）八才で、高津原小学校（生家は往時は肥前国佐賀県藤津郡鹿島、高津原村に属していた）に入学、仝十三年七月まで普通科を兼修。仝年九月から十七年三月まで、長崎県立鹿島中学校に学んで普通科を兼修している。

五月豊後日田の広瀬氏塾咸宜園に学び漢文を専修す（履歴書による）。当時の咸宜園は、淡窓歿後三十余年を経ていて、其間青村、林外、姑南を経て、広瀬濠田の時代であった。入門簿には

明治十八年五月七日入門
肥前国佐賀県藤津郡鹿島高津原村
勝屋馬三男　廿六才　、紹介者　高山大行

（淡窓全集下、入門簿之部、一四七頁）

となっているが、これは十六才の誤記であらう。入門の時には三十斤（二〇キログラム）の書籍をかついで歩いて行ったと、よく語っていた相である。昔の人が『笈を負う』と云う語を使用しているが、当時も同様の勉学がなされていたようである。

久大線も筑後軌道もない当時折角、咸宣園についたまではよかったが、十六才で背も低かったので、咸宣園のしよう（？）さんとかゞ、『旅費はやるから帰れ』と云ったが、向学心に燃えている彼は、『帰る位なら初めから来ないんだ』と頑張って入門を許された。そして学問に勉励したので、小さいが見どころがあると言われるようになり、塾頭にまで成った。明治十八年と云えば、濠田の開塾（二月廿五日）から年末までに百拾三名の入塾者（他に若干の洩があるようである）を数えている、恐らく一年の入塾者数では最盛期とも変らないと云ってもよい程であったと思はれる。明浜はこの咸宣園で十日遅れて入塾した竹内直の才学には一目おいたが、他は大した事はなかったと言っている。この竹内は

明治十八年五月十六日入門
愛媛県伊豫国温泉郡高岡村出身
竹内豊蔵長男　廿九才　（入門簿、一四七頁）

であり明治廿二年、長三州、秋月新太郎、清浦奎吾、諫山菽村、広瀬貞文を協賛員とし、協賛員の詩歌文章、故淡窓、旭窓、青村、林外の諸先生、長梅外、秋月橘門翁の講説詩文其他宣園関係の大家の詩文、和歌を掲載する学術雑誌「咸宣園」を東京牛込区神楽町二丁目廿番地、東宣園から刊行した時の編輯主幹であり、通称は菊五郎、南溪と号し、明浜との交友は永くつゞいた。また明浜の南行記には

……畏友勝屋子駿之所寄也。急遽折緘、中有手書一本、光彩射人……読之。読未数紙余乍拍案大声呼快……抑子識明浜先生之深、何以至此、曰、子駿西肥人、余少時同于豊之咸宣園、爾汝訂交、筆硯無之、起臥同室、後各従所向、天涯隔絶、雖不能復趁昔日接膝握手之歓……神交三十年於今矣、故世之識子駿、莫如余尤深也。嗚呼、使子駿生於斯文旺盛之時乎、則與当時諸大家並鑣角逐、風動一世。……の序文を寄せている人である。

（二）

十九年十一月、咸宣園の学業を了えて郷里鹿島に帰った翌明治二十年一月（二十才）に谷口藍田の塾に入った。藍田も咸

宣園の高弟で淡窓も

天保十年、此年入門スルモノ。……龍蔵ハ姓名屢々変ス。我塾ニ在リシ時ハ。多ク韓介石ト称ス。才気アリ。九級ニ上リ。都講ニ任ス。（懐旧樓筆記巻四十）

と記しており、藍田先生年譜には

……以韓為姓。弱冠遊日田咸宜園、称名六二字介石。及東遊、以是出入諸儒門、與当時名士交。

と記されている。兎に角、咸宜園出身の「天下の大儒」藍田の塾で更に漢学を学んだ。なお藍田は明治二十二年（六十八才）に上京して帰らなかったが、明浜は二十三年三月まで在塾している（履歴書）。

明浜は此の藍田塾でも重きをなしたようで、後に「藍田谷口先生全集」（附録一巻計五巻）編著をなしとげているが、それをみても至る所に師弟の密な関係が伺はれる。また南行記によれば、松平康国（字子寛、号天行、東洋文化学院教授）は

前三十年、予識勝屋子駿於藍田書院。子駿肥前鹿島人、為人修潔有気概、篤志励学、涵濡于古籍。予相與講習討論、知其頗精経義、而未知其能文也。……峨峨之山、洋洋之水、目之所覩、筆輒随之。胸中煙霞、與巖壑触発、自然成文、……抑予與子駿不相見者十有餘年、常意子駿以学問文章為性命、雖離索之後、其必進修不怠、深造精詣、有驚人者、今読此編果然。嗚呼、偉矣哉。君子之於学、厚積而薄発、此亦発之薄者尓、未足以概子駿。但其薄者尚如此、則其厚者果如何耶。（筆者註、藍田書院は後の東京の藍田書院を指す）

と藍田門下の明浜を激称している。山内惇（字子明、号樵雲、通称惇吉。南満学堂教授）も、

……明治乙未之歳、余負笈于東京、時谷口藍田学徳高一世、以宿儒夙侍講北白川親王。……余編先師遺稿、欲索序於当年交友、而鴨厓雲浜既不在……其存者僅藍田一人而已。乃欲見之而有所請未果、藍田易簀、常以為憾焉。辛亥之冬、至福井、始與勝屋子駿相識。子駿藍田高足也、一見如旧、暇則論学談文、毎得一詩、輒示之請益、恨相見之晩焉。其後……未嘗不懐子駿也。……余雖遂不及見藍田、猶得與子駿相知、亦足以釈多年之憾矣。故甘仏頭著糞之譏、喜而序之、併及藍田與先師之交

遊云。

と述べているが、如何に藍田が大儒であり、また明浜がその高足であったかゞわかるであらう。

二十三年四月からは、佐賀に私塾を開いて漢学を教授するかたはら、私立有隣学舘及び真宗振風教校での漢文教授に当っているこれが二十六年の九月までとなっているが、その十月に恩師藍田の帰郷を迎えている。

三十日（註、明治二十六年十月）、午後福岡発、三時入佐賀、三浦芳介裁判所長及勝屋馬三男、志田利弘、小池泉太郎、江口健六等来邀。　連抵三浦氏、微酌談旧、已而大宅一代衆来、邀余花月亭、設盛宴、因携英也赴之。会者田中政一郎、野口熊太郎、勝屋馬三男、峯英太郎……等諸子也。

十一月十三日、近午携松塢柏溪、赴森崎三岳招、勝屋子駿亦至。詩酒有興。

十一月十六日、読易、揮毫、乞書者紛至。○江原茂勝屋馬三男至。○晩酌、與阿鶴話新旧事。

十一月二十日、朝揮毫応需。立石森崎……等来別。已而鍋島、永野……来。與家人及鍋島……離酒、乃発、皆送到門而別。乗車過本町……憩問屋逸平家、渡辺立石森崎松本勝屋諸氏在此而待。逸平設餞宴、少酌乃辞、皆送到津頭。棹小舟達前岸、再乗車、踰龍王嶺、経稲佐六角抵山口、憩牛津、黄昏至佐賀、投野口熊太郎。旧門人也馬三男送到此

十一月二十一日、揮毫応需。三浦芳介来談……午后発佐賀、野口三浦勝屋大古場江口等送到停車場而別。……

以上は、王邸日暦抄上（藍田日記）から藍田の迎送に関した明浜の資料である。ところで王邸日暦抄中の明治二十七年二月三日の項をみると

午後開講筵、会者尾崎三輪田山本中村、勝屋馬三男、松本真弦……凡三十人。千田九郎助（若狭人）入門

と記されているから、少くとも廿六年十一月二十一日に、師の藍田を佐賀駅に送った後間もなく、遅くとも廿七年二月三日迄には上京している。尚ほ南行記附録に

湊川甲午上京途次

至哉楠子事。誰不慕遺風。万世呵姦賊。七生標忠孝。

の五絶が出ているので、甲午（二十七年）に上京したのであらう。そして更に藍田の教を受けていたことがわかる。その頃明浜は「東京神道実行教」の事務を取り扱い乍ら、国之礎社の編輯にも当っていたが、廿七年十月四日の王邸日暦に

聞朝鮮五道父老、哀泣乞我師討滅東学党、我師北進……露崎金蔵千葉県嫁崎人入門、勝屋子駿所介也。

とあり、二十八年十月廿四日には

勝屋馬三男来、介国学者林甕臣乞教、馬三男今在牛込神道実行教本舘。

とあるのも、この間の消息を物語っているが、この四月十五日は

広瀬貞文来、請以二十一日会星岡茶寮。とあり二十一日に

午後赴宣園祭於星岡茶寮、広瀬進一、秋月新太郎、清浦奎吾、横田国臣、広瀬貞文為幹事。相会者千原華溪、永瀬時衡、城井国綱、木村香雨、亀谷省軒、児王少介、石井隆甫、長寿吉、下里某、澄川恭民等、凡三十人許……

と宣園祭の記事がある。此処には明浜の名は挙げられてはいないが、東京でも「咸宣園」を刊行した東宣園の活動があり、宣園祭も宣園関係の者によって執り行われ、且つ前文中の広瀬貞文は明浜の咸宣園遊学中の恩師であってみれば、当然明浜の学殖は東京殊に咸宣園関係の人士に喧伝せられたであらう。

咸宣園では濠田の後は諫山菽村が経営していたが、二十六年菽村の病歿後は荒廃に期しつゝあった。そこで宣園縁故の人達は、その復興のために勝屋明浜を招携する事となった。

（三）

明浜の咸宣園講師時代は、淡窓全集下によれば、

勝屋講師時代（自明治二十九年丙甲（ママ）五月十五日、至同　三十年丁酉六月十八日）

となっている。丙甲は丙申の誤植であらうが、履歴書によれば、二十九年十月から三十年十月まで豊後日田咸宣園で漢文を教

授す、となっている。師の藍田は愛弟子が、咸宣園の教授になるについて次の文を書して勵している。

書勝屋子駿稿後

勝屋子駿詩文與学俱進、非復呉下阿蒙也。聞応日田聘、為咸宣園教授。夫人之患、在好為人師。雖然、亦教者学之半也。教而知困、困而益学、此古人之所教学相長也。宣園有蔵書萬巻、子往読之、勉哉。

明治二十九年十月、書之東京篤信舎

藍田山人中秋時年七十五

明浜は咸宣園の復興に若い（当時二十七才）情熱を傾倒した様である。三十年一月一日の日田新報に

今般勝屋紫明先生ヲ聘シ授業ヲ拡張セリ、

壷問、左伝、四書五経ノ講義、外史、十八史ノ独見会、詩文章ノ試業等

夜間、統文章軌範ノ開講アリ

数百箱ノ藏書生徒ノ借覧ヲ諾ス

豊後日田　咸　宣　園

が、広告に出ていて授業の一班を示している。又同日の記事に

◎咸宣園の月旦　本月月旦表に昇級を得たる生徒は如左、日田の文学追々復活の運に向へり諸子勉旃

加二級下佐藤直作、橋本香列、日野保田、加一級上林観吾肥前、中尾猶之豊前、秦省三直入、加一級下平野能吉日田、

◎宣園儒冠の制定　這般来宣園に於てハ冠制を立て生徒の耳目を一定せり。今冠制を記すれば正冠には玄色、喪冠には素冑、塾主及九級上より無級に至る凡そ二十等、等各々筋色又は筋数若くは徽章を以て別を立つ、即ち塾主ハ金徽章を用ゐ、九級上より五級下に至る凡そ十等、徽章銀を用ゐ、四級上より一級下に至る凡そ八等、徽章真鍮を用ゐ筋なし、筋色三級毎に変化す。筋数一ニ三を以て陞進す、素色より鼠色に上り鼠より茶、茶より黄、黄より翠、翠より朱、朱三筋は九級上の得業生

なり、塾主は紫三筋を以て標す。冠形は中古冠（俗に太子帽と云ふ）を用ゐるより（ママ）

と淡窓以来の月旦評で塾生の向学心を助長すると共に、生徒の服制（冠制）によって級を示して、更に勉学せしめて宣園の発展を期した企画であったが、明治三十年と云う年代における日田での漢学塾の経営は困難であったと思う。

さて当時の入門者を出身地、氏名、年令を記してみると

福岡県嘉穂郡	手島　円林		宇佐郡龍王村	荘野伊四郎	卅二才
日田郡豆田町	佐藤　直作	廿四才	下毛郡三郷村	井上　兼吉	
〃　〃	平野　熊吉	一四〃	日田郡三芳村	甲能　吉策	
下毛郡三郷村	長野　力丸	卅七〃	速見郡杵築町	溝部　従	廿二才
福岡県浮羽郡	浅井　周道	十六〃	日田郡豆田町	神村　與三	十六〃
豆田町	高山　俊夫	十四〃	〃　〃	宗村雷太郎	十九〃
日田郡光岡村	松浪　義喬	十六〃	〃　朝日村	田島　丈夫	十四〃
〃　豆田町	諫山　鷹城	十五〃	下毛郡山移村	竹井　徳念	十五〃
〃　〃	佐藤　種作		日田郡豆田町	大倉　金一	十六〃
〃　〃	松井秀二郎		〃　三花村	日野　保	十四〃
〃　〃	佐藤　儀作	十五才	〃　西有田村	野口　米蔵	十一〃
大原	橋本　建熊	十八〃	〃　〃	財津　健蔵	十五〃
隈町	後藤　勝平	十五〃	豊前京都郡	松島　栄蔵	十八〃
東有田村	麻生　美造	十五〃	佐賀郡春日村	林　観吾	十八〃
日田郡光岡村	城　曹譲	十九〃	下毛郡如水村	中尾　猶之	廿二〃

日田郡豆田町	岩尾　祐吉	十六才	日田郡三芳村	橋本　香列	廿一才
大分郡大分町	二宮　静	廿二〃	〃　東有田村	帆足和多三	十八〃
日田郡豆田町	高田　亀作	十九〃	直入郡久住村	河野　省三	廿　〃
玖珠郡八幡村	田中　源吾	十八〃	日田郡光岡村	中里　暉次	廿九〃
日田郡大鶴村	森山　準太	十七〃	〃　〃	中里　初次	十三〃
日田郡前津江村	和田　為房	十九〃	玖珠郡野上村	日野茂長治	十七〃
田川郡大任村	鈴木　喜助	廿　〃	佐賀郡川久保	大塚　宗信	十九〃
玖珠郡森町	帆足　清爾	十九〃	下毛郡上津村	林　管太郎	廿三〃
佐賀郡高木瀬村	木下　孫市	廿一〃	岡山県小田郡	小島　寿吉	廿七〃

の四十八名である。入門簿に年令が記入されるようになったのは天保二年（一八三一）からであるが、当時は旭窓二十五才で塾政を執り然も、「余退隠スト雖モ、家事を謙吉ニ伝ヘタルノミニテ、官府ノ方ハ、称号旧キニヨリテ、隠居ノ名ナシ。又家事塾政、皆謙吉ニ伝フルトイヘドモ、教授ノコトハ、猶廃セズ、日講及詩文ヲ削リ、月旦ヲ作ルコト、大抵余ノ手ヨリ成之」と五十才の淡窓が更にこれを指導していた黄金時代である。この年の元旦の入門からの四十八名と明浜時代の四十八名とを比較してみよう。

	天保二年当時		明治廿九年後	
A入門者が四八人揃うまで	正月元日――六月八日（五ヶ月余）		申五月一五日――酉六月一八日（一年一月）	
B十四才未満	六		一	
C日田出身者	六		二九	
D九州以外出身	一三		一	

学校教育（殊に義務教育）の普及が、前表A、B、C、Dの結果を来したであらう。殊にC、Dの表は遠隔の地からわざ日田に学ぶ者がいなくなった証左であらう。その一因は西国筋郡代の陣屋の所在地日田が、大分県日田町に転落したからである。殊にDの九州外の一名は、岡山県出身の小島寿吉であるが、明治廿八年六月発行の日田郡歴史（著者杉野竹次）に

印刷人　小島寿吉

大分県日田郡朝日村三十九番地寄留

とあるのと同一人物であらう。本籍が岡山県で、印刷技術者の小島氏が明治廿八年に日田郡朝日村に寄留していて、三十年六月十八日に入門したものと思われる。日田のこれまでの咸宣園入門者全国比と明浜時代を対照する。

	明浜以前	明浜時代	計
入門者総数	四五六九	四八	四六一七
内日田郡出身	六七二	二九	七〇一
日田郡の比率	〇、一〇三	〇、六〇五	

前表のように、日田郡に多く依存する咸宣園となり、その日田郡でも義務教育の普及等のために明浜の咸宣園経営も終局を迎えたのは当然であったと云えよう。

（四）

咸宣園の講師を辞した後の明浜は再度上京して藍田塾で勉強した、藍田塾はこれで三度目である。何時上京したか明でないが、履歴書の通り三十年十月頃までに咸宣園を辞して、翌三十一年の九月までには上京している。（履暦書は自三十一年十月、至三十三年三月――東京藍田書院ニテ漢文ヲ専修ス。となっている）

即ち藍田の「北陸紀行」三十一年九月三十日に「……当余誕辰也。会者……及勝屋馬三男……」とあり又、「南海紀行」三十二年九月一日にも「読易、援大学外史。……豊也寄書、報松本子楽勝屋子駿二子、以二十九日入京寓塾之事。」とあるよう

に老師藍田の教を受けている様子がわかる。其間三十一年六月に文部省検定漢文科中等教員免許状を受與された。そして勉学と共に、国之礎社の編輯、横浜大同学校の翻訳に従事したり又、早稲田専門学校高等文学部の講師も勤めた。

明治三十三年四月、佐賀県立唐津中学校の教師として赴任した。

明治己亥、余従先生在東京新宿藍田書院、翌春将赴任唐津、先生時寿七十有九、龍鐘倚杖而出、送之於門、嘱曰、吾老矣、斯道之任在二三子、勉旃。言猶在耳。越壬寅冬、先生易簀矣。今而念之、是為永訣也邪。

（藍田先生全集敍）

と、明浜は述べている。三十一才の門弟の門出を七十九の老師が老体に杖ついて送って、勵ましたのである。翌々明三十五年妻を迎えた。夫人は佐賀藩士族生野氏の出で、十一才年少の二十二才であった。ついで鹿島中学に転任した。郷里であり、学校は生家にも近く、二十前後に藍田に学んだのも此処である。彼は「斯道之任在二三子」を忘れず、旧友同好之士と海鳴吟社を再興した。この報せに喜んだ藍田は、次の詩を寄せている（恐らく現在伝わる藍田の最後の詩ではあるまいか）。

聞鹿島諸君再興海鳴吟社、欣然有作。

滴天風露近初秋。　故国欲帰難自由。
詩可以興事君父。　情何不厚共優游。
石山泉浄纓堪濯。　濱海月清船可浮。
忽得尺書欣忘寐。　諸盟能継旧風流。

驂按是時余自唐津移任鹿島、首與諸老再興吟社。当時與盟者、立石松塢、横沢以学、江原頑石、森崎三岳、大木独亭、久世黄龍、溝上研涯、今已前後下也、墓木将拱矣。其存者織田陸沈、朝日明鶴、小野原素堂、木下琴泉、徳島岳雲、及余数人而已、噫、師友不可復見、追懐悲涼、感極欲泣。

（藍田全集巻四）

併し吟社の再興を喜んだ恩師藍田も、この年十一月十四日没したので同門の士と謀って、紀恩之碑を鹿島城址に建てた。碑

は明治四十年に立ち、明治四十五年に落成式を挙げた。その時彼は「先師紀恩碑落成序」を選んで完成までの苦心を述べている中に、

……門人至誠、滴滴凝結、為一片紀恩碑、先生遺風、亭亭標榜、為千古表忠塔、人皆翁然有所仰往、譬如高山景行。與夫任人爵之勢、藉素封之力、以建豊碑鋳銅像者、自異其撰也。……　嗟、先生学風、長伝芳于櫻花旭影之中。

と感懐を述べている。尚は明治三十九年秋彼は上京した。先生の教を垂れた郷里であるが、「遂に先生の学を授くる約五年」であった。淡窓の咸宜園は特別としても、龍鐘倚杖して門に送られた師から、「吾老矣、斯道之任在二三子、勉旃。と言はれた嘱に応えるには、短い期間である。これは彼が熱心のあまりに種々意見を具申したりして、上司と衝突したためらしい。未亡人の懐古談にも「そういうちやいかんけど、〇〇さんに無茶口言うてやめた……」の語がある。上京の途中湊川神社に参拝した。

神戸賽楠公祠丁未上京途次

七世精忠天所酬。　終能血食至千秋。
西来過此誰無軾。　東疫為公皆下舟。
板蕩不違龍夢卜。　功成長使豹皮留。
姦雄易種玆新色。　猶汲湊川芳躅流。

（南行記附録）

上京するや直ちに恩師の墓に詣った。（始得謁先生之墓於青山――全集敍）

東京では、青山に私塾洙泗学堂を開いて、漢学を教授した。私塾では教授の他に知友と往来したり詩文に興じたりしたであらう。鹿洞遺稿（鹿洞は藍田の五子豊五郎）に

勝屋子駿洙泗学堂、開塾末旬日、有執贄入門、主人招余同賀、席上分韻。

黍鶏多謝自来迎。　同学相親如弟兄。
對榻可欣無俗気。　及門堪賀有書生。
遺経上口吾腸飽。　古道照顔君膽明。
偏望提携奨後進。　故山何必耦而耕。

丁未五夜、迎明浜春峰二兄、賞月草堂、分韻。

秋風払雨桂花飄。　佳客来時倒屣邀。
千里相逢談往事。　一年良会在今宵。
階前露重虫声濕。　林外雲晴月色饒。
共喜再興先子学。　敝帷自是不肅肅。

天長節、洙泗学堂清集、分韻。時子駿有北行之意、転結故及。

離菊方開九月霜。　佳辰相集頌　吾皇。
華夷慕徳　聖恩大。　洙泗遡源周道長。
知我天乎不尤怨。　微君誰共議行蔵。
鵬図何限洲南北。　須試滄溟萬里航。

天長節は十一月三日（九月は陰暦）である、この頃小樽中学の友人から懇望されて小樽に赴任する事になるが、

送勝屋子駿赴任小樽

肉食申来乏遠謀。　北門鎖鑰抱深憂。
雲分健鶻高盤月。　海裂長鯨怒負舟。
溟渤直連樺太島。　莽蒼遙接黒龍州。

送君何惜相逢暫。　九萬鵬程夢共遊。

等が録せられている。

明浜の小樽赴任は明治四十年の冬である、此処で長女が生れた。幾分の好奇心もあって、九州生れの明浜は小樽に三年半勤めたが、当時の北海道の寒さには閉口したらしい、明治四十四年の春福井中学に赴任した。その途中、東京で藍田の墓に復謁し、ついで途次に鎌倉で遊んだであらう。

鎌倉宮拜窟ニ首辛亥

敵笥魴鰥君失臣。　怪雲歴日国儲屯。

孤忠埋却無窮恨。　猶覚窖中如有人。

敢囚龍種此幽陸。　追憶当時使我啼。

窟窟始開新日月。　閟宮華表仰宸題。

福井には四十四年四月まで在任したと履歴書はなっているが、大正二年の夏（休暇を利用したのであらう）には、家族をつれて南朝の史跡を探訪している、この南行記の文末の「時大正二年歳次癸丑暑暇、西肥明浜幽人駿記」からみると、此の頃までは福井中学に勤めていたのであらう。

此の南行記によれば、福井を発して東行して名古屋で熱田神宮参詣。二日、高等学校に友人松本子楽を訪ね。三日より伊勢志摩を見物、ついで笠置山（五日）、奈良、橿原神宮（六日）、吉野（七日）と旅をつゞけ、其間に「鳥羽」、「二見暁望」「拜内外宮三首」、「登笠置山二首」、「拜神武綏靖二陵」、「奈良」等の題で詩を詠んでいるが、吉野では最も感興に浸ったとみえて、「芳野絶句五首」を詠んでいる。その一を示すと

一笻一笠阪程遥。　幾隊羽衣雲外飄。

皆是仙山求薬去。　路傍誰復問南朝。

ついで八日には高野に向った。

召主人立登山之計、極口説山道之難。且云此間五十町為一里、距山上女人堂　殆五里……峻阪不受輪、惟肩輿通之、雖徒行之人、傭夫扶腰以登。妻子聞之遽有難色……

であったが結局、肩輿二円二十銭、少女半額と云うので、財布の金を確めてみて、「終決意儀昇夫、皆百相獰悪、言語侏離……蓋古土蜘蛛遺俗也、余等頗之……」であったが、これで登り総持院に泊った。九日、十日高野見物、それにより和歌山、大阪を経て十四日は「欲訪藤樹書院遺跡、朝賃汽船、一路向大溝……」とありついで孝経真蹟、蕃山、東涯、一斎、中斎等の書幅を観て、藤樹の墓に展せんとしたが、

……有一小刹曰王林寺、就老尼問之、蚩蚩然不知復有藤樹先生者、徘徊捜索、得之門外草苔疎生処、

であったので

嗚呼、先生当時淵黙于畎畝之中、而雷聲所聞、上自王候大人、下至児童走卒、莫不識近江聖人。物換星移、君子之沢已斬、儒者之教又廃、所餘唯是藤樹遺跡耳。

の嘆を記している。それより竹生島に渡り、敦賀の気比宮を拝し、北陸の勤王の跡を偲んでは、「拝金崎宮」に

皇子英風賊胆寒。　当年是処陣雲闌。
自裁笑学忠臣手。　餘列千秋揮涙看。

とよんで、半月の旅を了えている。

南行記の旅行（大正二年）から間もなく、福井中学を辞めて愛知県名古屋に移ったようである。名古屋には松本子楽（亦、彊廬、肥前出身、八高教授）、浅野哲夫（師範学校教諭）、石川戈足（子淵、柳城）、大限栄一（子義、天山、鉄工業）等の知人がおり又、明濱の名声も当時斯学の人には喧伝されていたからであらう。

名古屋では数年、私立名古屋中学に勤めたと云うが、恐らく福井から転住した頃のことであらう。続南行記に「今玆乙卯夏、

獲三旬公暇」とあるが、大正乙卯は大正六年であるから、大正六年の夏休みに旅行に出たものと思う。

七月末日に旅に出立った、先年の南行記で見聞の及ばなかった南紀、四国の勤王の遺蹟をたづねるためである。今度は家族同伴でなく、門弟橋川子雍等と行を共にする。先づ大阪より金剛山千早城址（八月一日）。河内観心寺（二日）、田辺、勝浦（三日）、風雨のため旅館で船暈の疲れと、囲碁で過す（四日）、六日より熊野三山、那智の瀧に至り「……成瀧、其最壮而大者、為文覚水垢離遺跡。余亦乗輿裸程、攀援而降、試浴、支流迸出、水力殊弱者、猶能排倒人」、を味わい、徐福の墓に至って

抑、徐福之行、自秦而視之、其以方術進者、盡君也、棄君命于海、不忠也。帰化東方、貳心也。誘拐童幼男女、売国也。

と難じ乍ら、

然自我而視之、真是殖産興業之本、而文明開化之始也、後人豈可忘之乎。

と結んでいる。其後瀞溪等の名勝を探ったのち、八月十四日夜撫養に至る。ついで小豆島寒霞溪、高松（十五日）、に至り敷島舘に泊したが、

市中蕩児、歌舞於舘前広庭至深更、名曰盆踊、亦曰念仏踊、男女相誘無別、其害風傷俗莫甚焉、乃僧徒黠者為之俑、真王法之罪人也

と慨嘆する。翌日高松城市、栗林公園、金毘羅大権現に詣で多度津に抵る、十七日三津浜より生石村の旧友南溪の家につく。南溪の家では歓談ののち道後温泉に遊び、東方の高縄山を望んでは河野氏の義挙に正気磅礴の感を催す。土居通増の墳に詣では

渉水径田途僅通。　古墳留在眮村中。
傍利有僧圖義挙。　迎人苦説土居公。

と詠じたが、二十日南溪と別れて高浜に向った。

三津浜、與竹内子温惜別

埴生山下路嶙峋。　列曰秋陽汗漸干。
徐郷二子各有擔。　遠言送我三津浜。
汽車将発意未発。　相顧依依別故人。

この南行記、続南行記は大正十五年勤皇遺蹟南行記の表題で刊行して、賜天覧の栄誉に浴している。

恩師藍田の遺稿を整理した藍田全集の刊行もこの時期であった。藍田の遺稿はその逝去の前月、人口に膾炙した詩二百余首を訓点を施して、初学の者にも読み易いようにして、郷党の子弟に頒って、立志向道の資としたことがあったがもとより九牛の一毛にすぎない。翌年夏に遺稿詩文の計画をたてたが費用の点で行きづまり実現せず。大正九年にも門人の間に遺稿出版の計画があったが中廃した。大正十一年孔子二千四百年釈典に上京したのを機に、門弟が集り、種々検討した、その結果明浜は全力を挙げてこれに当り、韓門会（藍田門人の会）の友人と検討して、五巻の原稿が出来た。この努力も、十二年の関東大震災で焼失してしまったので、「余爽然自失」したが、更に男子豈可以一敗廃事乎と奮起して着手し十三年八月に僅に其旧に復する事が出来た。全集原稿の再着手には

都市震災如暴秦。　坑儒焚盡挾書人。
二年精力帰灰燼。　再度校讐多苦辛。
謝対客燈寒雨夜。　聞鶏呵筆粛霜晨。
豈無天意藏遺策。　師道応開両漢春。

慨然として賦詩の後更に「嗚呼、先生不可復見矣、受業於先生、従事斯文者、寥寥如晨星と嘆じている。

尚は伝える処によれば、古川松根伝、鍋島侯の伝記も書き、名古屋では殿様の伝記も依頼されたが果さず、（徳富蘇峰が書いた相である）。暇さえあれば、早朝でも夜半でもとびおきて筆を走らせたので、身体に悪いですよと注意しても、

「軍人は、戦場では生命を墜しても危ないと云って逃げはしない、だから学者が生命を睹して学問に勵むのは当然の事だ」と云って聞かなかったと云う。この勉学で無理をしたためか、昭和四年名古屋で脳溢血で倒れ、鹿島の生家で療養していたが、昭和八年十月二十二日六十四才で永眠した。

（五）

明浜は夫人との間に三女をもうけた。長女は瑞穂（ミズホ）、次女が俱（クトエ）、三女が徽音（ヨシネ）で、長女は瑞穂国から名付けたものであるが、二、三女は漢籍から選んだものである。学校で先生からこんな読めない名前では困るとは、俱夫人（此の人が夫君安一氏との間に四女があり、現に、勝屋家で母堂に仕えている）の話である。明浜夫人等による思い出によると、大変厳格な性質で、総てに厳しかったし、短気でもあったので叱りつける事はあったが、無茶な道理に合はない事は云わなかった相である。そして叱り方も、あっさりしていた。子供を叱った事もあるが、常に無言の裡に深い慈愛がこもっていた。　夫人が東京の学校に行く様になった時にも

いとし子が東だちせしその日より
　はや帰る日を待ちわびるなり

と詠んでいる。

結婚は恋愛でも見合でもなく従兄が仲に立ってお前は明浜に合うだろうといって夫人は只写真を見ただけで結婚した相である。夫人の全体としての夫婦生活の思い出は「私はおさんどんと子守と墨すり役だった」と云っている。読書、詩（文）作の暇に碁の客が来る、詩文の添削の依頼者が来る、揮毫依頼者が来る。そんな時に子供をおんぶして、御飯を焚いたり酒の酣をつけて、客を酬応したり、一枚揮毫依頼されても何枚も自分で満足するまで書くので、その時の硯の墨を磨るのが夫人の役であった揮毫は他家に招れて書いたものもあるが、結局自宅には一枚も残っていない様である。碁は好きで二段位であったという。囲碁の熟語も明浜が創始者だ相である。学校に勤めている頃でも、同学の士の教を乞う者には自宅で四書五経等を教えて

いた。毎日のように見える者もあったが、福井中学では土曜日をこれにあてゝいた。

次に明浜の自己評価であるが、雑誌『太陽』等えの投稿をすゝめる者があっても「あんなものには出す気がせぬ」と言って応じなかった。そして「自分は今は世に用いられなくても、百年ばかりしたら自分の真価も少しはわかるようになるだろう」と言っていた。

知人の評価であるが、谷口鹿洞の南薫樓記に

……勝屋子駿将帰我郷鹿島、請樓号於家君、家君号曰南薫、蓋取之於南風之詩也。……家君之所望于子駿可謂矣。子駿性峭直峻勵、以才自負、不與人屈下、往往招群小之愠。若能補以南風之和、而養寛裕温柔之徳、則含弘光大之域亦可達也。家君之所于子駿可謂備矣。子駿其可不可勉哉。

とある。性格は全く藍田父子のみた峭直峻勵であったろう。又咸宣園以来の畏友竹内直は南行記小跋に

邦儒中、才識共高、学力富贍、詩文兼長者、余特推頼三陽翁。……子駿之才学、今世無比、

と今世の山陽に比しており、松本久子楽は、

……奇景壮観。写以雄健之筆、而踉蹌欲出、尋常瑣事、敍以典雅之文、而無微不到、是子駿独擅場、不許他人追随……此二文、足以不朽子駿矣。

と評している。要するにその性が峭直峻勵であったゝめに往々にして群小之愠を招く事はあっても、老師が「吾老たり斯道之任は二三子に在り」の語を忘れずに漢学者の道（尤も明浜は儒学の一派に偏することなく、余又愛禅、遊越永平寺と仏教にも理解があり国学者との交際もあったが）即ち先生の教を貫いた最後の人ではあるまいか。（完）

参考資料

藍田谷口先生全集

勤王遺蹟　南行記、

淡窓全集

明治百年記念　咸宜園入門簿抄

咸宜園写真帖

日田新報

日田郡歴史　　以上。

本稿は日田新報の資料提供其他畏友広瀬恒太氏の好意によるところ大であった事を附記する。